

たる事 此度も不成 益 胸を冷やしけり

頼朝上洛并曾我兄弟工藤を狙事

比は建久二年 南都大仏供養之事有 頼朝公 結縁の為 年来上

洛之望旁 此度上洛なり 十月四日 鎌倉を立 有洛中逗留 供

養終り 十一月十七日 京<sup>はつ</sup>発帰鎌倉なり 此節 畠山殿心懸て 曾

我兄弟へ使あり 今度 帰鎌倉の供奉 和田 畠山 三浦 土肥

岡崎 小山 結城 千葉 相馬 工藤など 行列も花麗に候 見物

に道迄出給へとの事なり 心得有ける重忠の使なり 依て 兄弟

心得て立 道を急ぎ 遠州橋本にて行合 和田 畠山の雑兵に紛

れて 宿々にて工藤を狙ふ 序で悪敷打過 駿河の沖津の宿にて

工藤は四十騎を召具して 行列之うちにあり 曾我兄弟 町家の軒

下相窺ふ 時に祐経 早く見咎 盗人原と見ゆる 討殺せと 大勢

ひ立騒ぐ 大勢の中 不可叶 急ぎ立隠れ 和田殿之同勢の中に入

工藤使を遣し 和田殿の同勢の中に盗人を「と言ふ」 義盛大きに

怒り 和田が家人を盗人とは心得 是非左様の悪言申さば 祐経

と「いへども」和田が存分にありと 工藤に直談す 祐経不及 是

非率□に申たり 御免候得と閉口す この已後 曾我兄弟も和田殿

と同道して 鎌倉に社は帰りけり

付記

資料の閲覧、翻刻に際して御高配を賜りました宮崎県立図書  
館に、厚く御礼申し上げます。

〔平成十年十一月三十日受理〕

店に寄付たる所あり 此宿に入 休息する□時に 表より拾人斗り  
 そろ／＼と押込来り 亭主付込んだり 此所に 曾我兄弟 貧に零  
 落して 盜賊に成て忍ぶ 鎌倉殿より御下知として 八幡七郎が討  
 手に来れり 早く出せと匂りたり 五郎は随分静に忍びつるが 彼  
 難言を聞て大きに怒り やあら憎き奴原や 兄上は八幡を討給へ  
 我は跡の青侍どもを生捕にすべき也と 即時隣家の軒下を伝つて  
 表の戸口に仁王立に立て 曾我五郎時宗是にあり 鎌倉殿よりの討  
 手ならば 親類土肥 三浦 和田 畠山の輩可被参に 工藤が家人  
 八幡七郎とは 近比不得心 兄上十郎殿 向かう様に討当給へ 跡  
 には五郎時宗有と 大音にて呼りたり 拾人斗りの男ども 五郎が  
 軀を一目見て 二目共不見 □震ひ恐れて 我々は何之子細も不存  
 只 八幡殿の御下知差図 依ての荒立也 御免あれとて 拾人斗之  
 者共 不残庭に畏りたり 奥の方よりは 十郎太刀抜かけて待居た

れば ひとへに鷹に追るゝ雉子の如くなり 時「に」五郎言ふやう  
 は 然らば 汝原拾人寄て 八幡七郎を可生捕 其時は必許べし  
 □給へり 若者共 奉畏候とて 拾人一時に立懸り 差もの八幡七  
 郎を生捕 繩をかけて面縛せり 五郎此上にも合点せず 然ば 八  
 幡が首を討てと言 八幡が身になりて 扱も是非なき有形也 拾人  
 之者共 左右より立廻りて 終に八幡が首を討落せり 五郎 さら  
 ば 跡の奴原は我生捕にすべきとて 六人まで 踏倒て繩をかけた  
 三人は十郎討留 壱人は逃失けり 誠に天命の助る所 此節 土肥  
 弥太郎遠平は 曾我兄弟此頃疏遠故に 見舞来りとて 此所にて行  
 合 此次第を聞届 扱社幸ひ也とて 地下之者共不可騒とて 死骸  
 共集め表に出して庭打着せて 高札を立て 此所に盜賊 日比の悪  
 党行合 残りなく刑罰するもの也 土肥弥太郎遠平 と書て立置く  
 鎌倉へは 弥太郎盜賊を討たるとの披露にて相済たり 工藤が巧み

人の影向<sup>やうかう</sup>かや 扱<sup>あつか</sup>も美女かな 壺曲の面白さ 座中うゝつ心もなく

二夜三日の酒宴 またなき花麗の有様也 去<sup>は</sup>ほどに 諸言はひとへ

に 工藤<sup>くどう</sup>が大軍の闇討を防ぐ目当の酒宴と 誰言ともなく大磯中の

取沙汰 評判とりぐ<sup>ぐ</sup>也 八幡七郎聞て 密<sup>ひそ</sup>かに聞繕ふに 曾我兄

弟と和田と一座あり 旁 大きに首尾悪敷 此度は中々相叶まじと

工藤<sup>くどう</sup>が方へも委細注進して そろりぐ<sup>ぐ</sup>と引取て 大磯には一人も

なかりけり 和田殿も此度 虎御前をも同道すべきと被思召けれ共

其儘に置たらば また工藤<sup>くどう</sup>が入来り 方便にも可成哉<sup>や</sup>と 其事なく

一門中 曾我兄弟を同道して 鎌倉に帰り給<sup>たま</sup>ふ 此儀 昔<sup>むかし</sup>より今に

四百年に及<sup>およ</sup>べども 和田酒盛とて 絶へせぬ噂となりける

# 八幡七郎被討事

工藤左衛門祐経は 日比心を尽して大磯闇討の事 不相叶残念也

彼等兄弟 影身に添ふて附狙ふ 近比を以 安心ならざる事なり

彼等天魔の術を得たり共 祐経を討んは蟠螂<sup>ばんろう</sup>が斧也とは思へども

身を安楽には置<sup>お</sup>がたし 大勢ひ催して闇討にせば また土肥 三浦

畠山杯と後見せば 結句後難を引出すべき也 先用心第一なりとて

河津<sup>かづ</sup>が一家の扶助を蒙りたる者共をば悉く追返<sup>けもの</sup> 獣穴を立て探<sup>さ</sup>して

常々の宿にも中々用心稠敷構へたり

爰に 彼八幡七郎は力量強き勇士也 三十人が力量ありと言ふ

祐経密<sup>ひそ</sup>に七郎を近付て 兎角曾我兄弟を討ずんば 我身安穩成るま

じ 汝<sup>をど</sup>に劣らん力士拾人を差添可申の条 土肥<sup>どひ</sup>と鎌倉の間にて待<sup>まち</sup>ち

伏<sup>ふ</sup>して可討取 常々土肥に通ふよし 酒匂の辺にて可討と言ふ 八

幡奉畏とて 拾人の力士を召連て 土肥 三浦に通ふなる曾我の道

筋を相窺ふ 酒匂之宿の酒を売店<sup>みせ</sup>に常々立廻り 相窺へり かくて

曾我兄弟は 土肥の伯母御前常に参ル毎に 兄弟同道にて往来の茶

手持無沙汰 引退たり 扱 此跡に 誰人も五郎側に来らず。また

時宗も 合点行ねば粗忽もならず居たりけり 其時に 虎御前利発

成人故に すり／＼と立出て有めんと 五郎様 能聞給へ 此度の

儀 和田様に全く疎略なき子細もあり 十郎様も油断少しもなし

御心得違ひ 先御立腹を被静て 様子を聞給へと立寄 時に五郎は

大の眼を見開き 古狐め 売女め 十郎がうつけいたますとも 五

郎は己に騙さるゝべきや 女の面は死ても不便也と 拳を上て張り

碎くべしと 思ひ込んで逸りけり 虎は才覚発明の人にして 其儘

早く 島台の影に隠れける 扱 愛想なき時宗や 虎の髪ゆひめの結目を

打碎き 島台は落欠き 微塵に打碎きけり さりとて虎は十郎の妻

也 箱王も 去年以来は虎御前の養ひにて在ながら 如此の躰 近

比不興千万也 其時 義盛 五郎に向ひ 如何にや 時宗よ けな

げにはあられども無法也 心を静めて前後を聞給へ 人が違ふぞや

和田義盛也 何に恐るゝ事あつて 工藤に被頼 兄弟を討んと計る

べきや 又 曾我は三浦の子の方故に 常々いたはり申筋は 兼て

知り給ふらん 此度 工藤 不知人百人の壮士を選び 大磯の宿に

入て 兄弟を闇討にせんとす 兄弟は立所に亡びなん 此度に残念

不過之我心を尽して 忍びて面々を介抱するに 酒宴に事寄て 陰

ながらこれを救ふ 然る時は 重ねて大勢狙ひ討は有まじ。また

ひとつには 十郎常々大磯の遊び心ひかれ 大願を忘れやせん 此

故に 長が娘の虎御前は義盛が養娘として 十郎の妻とせんと

彼是の心を以て此度の遊興也 然るに 悪しくも心得違ひ給ふもの

哉 義盛が深き心底を水になし給ふ 五郎法外也 子細を案じ給へ

と申さるゝ 五郎大きに拍子抜けして 默然として立退き 大きに

機嫌直りて 是より和順酒宴と成るうちに 命拾ひの虎御前 皆打

交り 和順余りの悦に 今様一曲諷ひ終りて 扇開きて立舞姿 天

油断致さるゝ其上 知り給わずや 大磯小磯の宿中に 工藤左衛

門祐経が家人共数十人充滿して 兄弟を闇討にすべきと構へたり

祐経が居たらんには 天の与へなれども 其時は隠れて不出合 今

又 和田殿此所の酒宴 事可有とも思はれず 抑 天下の武士の棟

梁 武者所の身として 虎御前との酒宴可有事にあらず 是は 工

藤に頼れて 我々を座敷の口論に事寄て 可討との仕方紛れなし

此所にうかと居給ふ 是は奪れたるにや あら／＼日本一の不覺人

好色に目も見へず かゝる奇怪の事社あれ 誰人にも 手差者こ

そ不運なれ 真向立割 太刀の働の続かん社 凡座中に壱人も置ま

じと 大音にて言内に 朝比奈とは右片手にて 其儘に捻合たり

誠に 古今無双の大力士 座中誰一言言ふ者もなし 大き成思案違

の大間違也

和田兎角被申ず 朝比奈 此方へ来れと 三郎を訳と思はるゝ

義秀少も不得心 父の前後の無礼者 此座を立ずんば不可有と言

五郎は可言も詞なし 此節 佐原十郎義連立寄て 朝比奈よ 苦し

からず 無礼あつても不苦と 立寄て引退けんとす 佐原も三浦大

助の末子にて 勇力たくましき武士也 甥の三郎片手を延して 佐

原が腰の所をかい掴んで突き放したり 佐原は跡にとゝ走り 障子

三本打破りて 腰にもたまらず大庭に殞れ落たり 伯父と言へども

毛頭無遠慮 朝比奈が剛力こそたくましかれ 三郎は弥五郎を引立

んとして 腕を不放 押合足ぞ松の木のごとし 顔は天火夜叉王の

如く 次第／＼に 五郎も三郎も力募て 今は中々寄付人もなく

其時 義盛怒て 三郎よ 義秀よ 誰か思ふ 父は和田左衛門義盛

也 勇も義も礼讓も能知りたり 先五郎が事より 汝無礼 法に過

たり 若輩者と 五郎も用捨有ん すべき事あれ 義盛が手有 汝

立退ずんば手討にすべきと 怒らるゝ 流石に三郎も父に匂られて

武者所也 天下の諸大名手を措し 自身迎給へば 是非はともかく  
 も 一応は座に可出筈也と 朝比奈も相供に座に出たり 大床を見  
 渡せば あら夥しの酒宴かな 遠侍所 拔縁迄 三浦一家の若殿原  
 郎等七八十人 また 大磯の女郎共百余人 三界の珍品 蓬萊を鏝  
 り立 音曲 歌舞 誠に極楽浄土の楽しみかや 遙に座上を見れば  
 虎御前なり 中央には和田殿之座有 右には十郎 薄汚れたる浅黄  
 の直垂着て 静に社は見へにけり 折節和順の酒宴也 互に太刀を  
 とりたれば 十郎も無力也 一門頭には 佐原十郎頭取也 五郎し  
 ばく見繕ひて 心につと思ひけるは 宿中には工藤家人 力士み  
 ちくたり ひとへに兄弟を可討との結構か または 工藤は当時  
 代の切り人也 和田殿をかたらいて 此所に誘ひ出して 和田に後  
 見して討取 一家中への申開き 此義盛を證人にすべきぞや いで  
 く事を調べ 大方の目釘の続かんほどは 大磯の宿中は死人の山

を築べきか 兄十郎殿社心得ねと 少も憶せず 和田上座左之方に  
 押直り 大紋の袖をまくり上 草摺を揺り出て 左膝を押立 右の  
 膝を義盛の前に突かけて 赤木の柄を太刀の柄砕る斗に握りて 詰  
 懸たり 此勢ひ 既に夜叉王のごとし ひとへに和田と一勝負すべ  
 き有様也 和田の一門郎等らは すはや大事の出来たりと 各片唾  
 を吞て 目を配るといへども 五郎が勇猛に押されて 壺人も寄付  
 人あらず 時に 朝比奈三郎つゝと来り いかによ五郎 父上の前  
 に 余り急也 少しひらき給へと 時宗が腕に取付て退けんと「す」  
 時宗振返り見て 扱 小児之姿にて いしくも強き冠者かな 前に  
 投げんと思へども 三郎踏んばりて動かず 義秀引立んとすれ共  
 五郎は盤石のごとくなり 時宗が力量 遙に余慶ありと見へたり  
 此押合へし合する内に 言涼しく十郎に申条 いかによ成殿 悪し  
 くも心得給ふものかな 天晴 不覺人也 大願の有身を持 常々も

曾我根元評判大全 卷之八

本章

曾我五郎時宗座に入 四方を見廻して 是非を不知 只十郎は虜  
になりたりと心得 和田殿の左の上座に直り 両眼は星のごとく

声は雷の如く大音にて 如何 和田義盛并一類中 聞給へ 曾我は  
他名を継ぐといへども 河津三郎祐泰が子也 和田 三浦は親類也

今浪人の上に仇敵を持兩人 独歩の我々 介抱こそ非ずとも 囚人  
になし 恥を与へ 当日目に余る繁榮の工藤に 力を添給ふ士法有

哉と 荒言す 十郎も閉口す 虎御前 五郎が側に寄て囁かんとす

五郎曾て不応 漸に十郎が制しに依て穩便になり 酒宴日夜のうち

に 工藤が兵士も皆立帰れり 此故に 和田殿も曾我兄弟を同道に

て帰宿なり 工藤 今は詮方なく 八幡三郎が嫡子八幡七郎に 力

士十人を差添て 忍びくゝに兄弟を立挾んで切伏せんとす 五郎が

勇猛不可当 終には八幡を生捕 工藤が家人と知て 死罪せり か

くて 頼朝公 大仏供養に上洛之節 畠山殿より 兄弟を被招 道

中にて種々に相窺ふと言へども 其事ならず 鎌倉へ帰りけり

凡 力量は貴剛強と言ひ 剛は金剛にして 心の丈夫に剛きを言

強は姿の強きを言へり 強力と斗りにては 下賤の□助 相撲取り

けるの者 米担ぎ 浦山の漁師 木こり 暮請の石□木□運の□□

宝なり 剛は弱しとも 心底丈夫に 慥成人心の剛き 義位正しき

勇猛に しかし 死を不離 業も姿も心も如天神 英雄の武士とは

曾我五郎時宗 朝比奈三郎義秀 彼等は日の本にて稀なり 五郎時

宗勇言 和田制詞和順酒宴の事 五郎時宗 三郎義秀 始終斗角の

大力也 若争はゞ いつ迄も落着すまじきに 義盛座を立て 制ら

く 是非に座敷に出給へ 仮令 和田に不足ありとても 舎兄十郎

有 義盛迎に來りたりと 袖を取て誘はるゝ 流石に和田は當時の

出して 近辺に近付難き勢ひ 走馬のごとく也 二目と見る人もな

し 此時 義盛思案して 朝比奈三郎は未十三歳 童形也 仮令たとへ

今粗忽そご有ても 時宗 左迄咎とがもすまじと思はれるにや いか三

郎 参りて 五郎を迎来れ 来らずんば 五郎に心安く被参よ 舍

兄十郎も此所に有と言耕て 同道して来れと宣のたまふ 三郎義秀 若年

といへども小舟を担かつぐ程ほどの大力量也 十三歳には大人風にして 奉

畏 即時に立て 障子をさつと開き いかによ五郎殿 父義盛の御

召也 朝比奈 御迎に参候まゐと言 小冠者なれば 五郎徒見て 打笑

たる斗也 朝比奈は何心なく 大紋は引裂ひきけんと心得て 腹巻くさの草

摺三枚ひとつに押握おさりて 此方へ来り給たまへと引立申に 強く覚へた

り 五郎じつと恠こたへて 扱 若年の強力 しれ者かなと 徒□力足

を踏ふんで恠こたへたり 朝比奈は若年といへども 大剛力の若者也 何

にもせよ 是非ぜひに引立んと 跨またがり踏ふん張はつたり 朝比奈も五郎も

顔色赤く筋張はり 両足は松の木をも立たる如く ゑいや／＼と踏ふむ

此時 板敷三枚踏ふみ破といへども 五郎が立たる両足動はこそ 其

時は五郎も三郎も 只帝釈たいしゃく修羅の王の如く 又 四天王の木像のご

とく也 義盛是を見て 扱も不思議ふしぎの力士哉 我子の力量劣せうりたり

と言われんも残念也 又 五郎がは出んも本意なし 此所は和田が言

ふべしと すつと立て廊下に出て いかによ五郎 悪敷心得こころ給たまふもの

哉 義盛 何に疎略そりやくすべきぞや 十郎も坐敷に居ゐり給たまふ 殊に又 内

々にて物語すべき事もあり 此方へ出給たまへ 和田が迎に来りたりと

被申 時に五郎 流石に義盛の詞黙もくしがたく 力足を踏ふみ直し 顔

色赤らかにして 義盛の御迎へ 仮令たとへ何程ほどの事有とも 先座敷へ参

らめとて 同道して酒宴の座にこそ出にけり



座に付て座し給ふ 和田は尋常に 十郎殿 兼て此所に居給ふも知  
りたりと 小声になりて 貴殿は牢人の身の上に大願有 人の故無  
き詞論 心逸り仕損じ給ふな 工藤左衛門大勢を催して 兄弟を聞  
討にすべきとの事 慥に聞届く 明日を定日に極む 此ゆへに 我  
密に 其事となく彼等が大勢を差押ゆるもの也 誠に 十郎は近き  
親類也 世になき曾我兄弟に 何しに義盛意恨の候べき 又 虎御  
前に心ひかれて 兼て念願に可成哉 笑止殿にてぞ 何かの思はく  
有て 和田が来たり 思ふ程にもなき十郎哉と申給へば 十郎威儀  
を□して 至極之詞 げに尤の事也 虎御前も泪にむせばる、誠  
に親切成有様 一門郎等 皆哀れの泪を流す いや／＼ 先□にし  
又 酒宴にこそなりにける 然る所に 彼粧坂の五郎時宗は 前方  
十郎の座敷へ出様 出まじきの詮義の折節 既に口論に及 危しと  
虎之為知たるに驚き 大きに怒り 和田心底こそ難心得 又 今日

工藤が家人原百余人 此宿所に入来れり 不心得 是は和田 工藤  
馴れ合て 兄弟を可討との覚悟 比興千万ござんなれ 心得たりと  
腹巻取て投かけ 其上にかちん木爪之大紋着て 太刀横たへ 一散  
に飛鳥のごとく走り来りて 大門つつと入来 座敷には不出 廊下  
の縁に立跨がりて 障子簾を隔て 仁王立に座敷の様子を指覗て見  
るに 兄十郎殿は無事也と安堵して 相窺居たりける 其顔のすさ  
まじさ 五郎は当年十七歳 金剛力士の如く見へし 座中大きに驚  
き 誰かや 扱怪しからずと言 知人有て 五郎時宗也と言 彼は  
す、どき若者 大力士也と 皆人手袋を引 大に恐れたり 此時に  
義盛被申は 誰か有 曾我五郎に 十郎も此座に居給ふ 心安く入  
来り給へと申「せ」と言 奉畏とて 数十人入替り／＼ 来れと言  
へども 五郎は一言の詞もなく 只 木偶の如く也 既に早廿人に  
及ぶ使有といへども 五郎は物をも言わず 只仁王立に立て 眼見

推参なる若殿原哉 何者と思ふ 此所に曾我十郎祐成有 和田殿は

大人<sup>おとな</sup>気なき心底かな まさなく親類中也 常に音信も□さる、今

の振舞<sup>かふるまひ</sup>こそ心得難し 此座の中に入たらん人は誰にても不運也 曾

我が太刀先見すべしと 既に立上りて口論に及んとす 扱も不慮の

珍事也 此騒動粧坂へ聞へければ 五郎は慌<sup>あわ</sup>て、腹巻投かけ出た

る也 扱 十郎座敷番し 大にもつれて座にも不出 又 押込人も

なく 近比不興千万此事也 義盛此由を聞給<sup>き</sup>ひ 近習の老武者小坪

八郎と言者を使にして 子細を申含て差越たり 此故に 八郎来て

十郎に申は 先静り給<sup>き</sup>へと小声に成 主人義盛此度の酒宴 全く自

分の慰にあらず 爰に一大事之候 工藤左衛門祐経 百人の力士を

操て 明日を定日として御兄弟闇討にせんとす 又 虎御前の宿所

に居給<sup>ゐ</sup>ひて 十郎殿之心底横<sup>おちやく</sup>着にやならん 義盛方に虎御前を養ひ

娘として妻合有 義盛<sup>と</sup>殿、聳として威勢をも付 本意も達さる、様

にと 余所ながら介抱 只偏に 此度の酒宴は十郎殿の御為斗り也

此故を打付に申時は 曾我殿に恩をかけがましく 本意に非<sup>ず</sup> 和

田之心底は如此也 よしなき争ひを止て 先 虎御前を座敷に出さ

れ 和田殿御尋給<sup>き</sup>は 十郎殿も座敷へ出給<sup>き</sup>へと言 十郎大に感心

して 扱 忝御心底 何かさて隔意<sup>へきぐい</sup>仕間敷と言 虎御前も心とけ

扱は 座敷<sup>じま</sup>に出まじき事にもあらず 十郎殿も跡より出給<sup>き</sup>へと 虎

御前粧<sup>ひ</sup> 花麗<sup>はなうい</sup>を尽して出給<sup>き</sup>へり げにや諸人之恋慕<sup>こ</sup>も断哉 都に

も田舎にも 又なき美女の十八歳之壮り之姿也 義盛も驚きて 君

人之慕ふも断也と被申 諸人皆目もあやに詠入たり 義盛申さる、

は 此方へ来り給<sup>き</sup>へと 座上に置いて 如何にや虎 あながちに義盛

申に非<sup>ず</sup> 十郎之為也 心よく座し給<sup>き</sup>へと 若やかに酒宴始りて

十郎殿にも出給<sup>き</sup>へと使走る 此節 十郎も彼の小坪八郎が物語に心

とけて 辞退すべきに非<sup>ず</sup> 濃<sup>こ</sup>き狩衣の衣紋引立繕ひて 義盛の下

相州 衣笠 三浦 三崎 其外 祖父大助義明之遺領 三浦介領之

して 荒井の城にあり 和田義盛は房州一ヶ国 并上総白里の浜辺

銚浦 忍□ 凡三万町の領主也 此駒若丸が領とて 房州の朝比奈

を配分せり 此故に 朝比奈三郎と号し 今年拾三歳になれり 義

秀 若年より弓馬の道に達し 若年なれ共 廿歳前後の若盛りの人

より大柄にして 力量は無限強く 鎌倉中に似よりたる人もなし

過取りたる真田 股野 河津より拔群に 十三の時は是に勝れり

荒馬乗りて相模過ぎ 漁舟を一艘 笠のごとく被り 両手にて差上

たる事 十三の夏也 是は三浦に漁り出て 俄に大夕立に逢 難儀

父義盛も波□するに 小舟一艘押し上て両手に差上 笠に被り 父

義盛も此内に入たり 日の本に又有るまじき大強力也 此三郎義秀

も同道致けり 去程に 和田殿大寄に 大磯の宿中大に賑ひ 大磯

中には 家人みちくゝて 一門郎等打寛きたる酒宴也 和田 長の

尼公に申さるゝは 虎御前を座敷へ出し候へとの使 度々也 虎御

前は部屋に有 十郎も一所に居たり 祐成此所に居給ふに 打捨て

義盛公に対面は叶まじと言 當時は義盛 天下の武者所也 其權威

代に□□也 故に 老母 達て虎に出給へと申 又 家内の者共迄

皆々出ませ給へと諫るに 其内時刻延引 和田太郎不興有 當時

義盛が命に背くは不心得 出ずんば無理に出せと匂らるゝ故に 若

殿原 酒機嫌に押込て 虎を引立んと騒ぐ時に 虎御前かいゝ敷

女にても賤まるゝものに非ず 和田殿とやらん 鎌倉にては恐るべ

し 此内にては主人は我也 若殿原の狼藉 出て行給へ 殊に又

我方には常の客人有 和田殿とは違 貧者なれども思ひ人也 捨て

出る事は不可有と荒言申 若殿原 弥立重り よしや無駄に押込て

引立て御前に可出とて 既に押入らんと「す」 十郎今は泳兼て

大紋の袖をまくり上て さす股立有を取上 赤柄之太刀を抜き懸

忘却やせん 十郎が心底 是非虎と夫婦にならんずるとの事ならば

長聲には残念也 和田娘に養ひて 十郎に妻合すべし 虎が大磯に

あるゆへに 色々の憂き事も有 手前に呼び入べきと工夫 大磯の

長が館にて 虎をも呼んで 一家郎等を会して来ル 今日より廿二

日迄三日三夜 大磯にて酒宴すべきとて 一門には佐々木十郎を頭

取として子方斗り 究竟の力士三十人 郎等には随分英兵勇力勝れ

たる若殿原 小坪八郎を頭取として五十人 雑兵は式百人 彼工藤

が闇討の定日廿一日を中に取て 大磯の宿に遊興有 誠に前代未聞

の大酒盛と評判せり 和田左衛門 其比は四十歳 壮年の男盛り也

頼朝公 伊東におゐて御旗を上げ給ふ時 相州小坪坂にて 畠山の

治郎重忠と合戦の時 十九歳成事 東鑑盛衰記に見へたり 其節よ

り廿一年の歳霜を過て 今年四十歳也 此度 若年といへども 朝

比奈三郎義秀も義盛と同道也 此時 朝比奈漸々十三歳

朝比奈三郎は日本無双の勇士にて 元来 木曾左馬頭義仲落胤に

紛れなし 義仲の妻巴御前 美女にして大剛力なり 巴の腹に出生

せり 先年 木曾義仲為追討 九郎義経公上洛の時 和田 畠山先

陣たり 然るに 栗津ヶ原 大津逢坂之戦ひの節 巴は信州木曾安

雲の郡に隠れて 後に鎌倉に□□□ 無双の力量 無双の美人故に

政子御前に出頭 鎌倉の館有 然処 男子出生す 木曾義仲の子也

行末鎌倉の御敵とも可成と 既に可被殺に極る 巴 大に歎き 懷

胎の子のいとをしさに生捕と成 □□□をも晒せと いたく歎く 政

子御前不便に思召て 此節 和田左衛門 妻子に離れたり 此故に

巴御前を妻に給はる 只 無双の大力量ゆへ 嫁して実子を儲 鎌

倉殿之御用にも立との事 此節に 朝比奈は駒若丸とて 当歳の童

形也 義盛則養ひ取 実子より不便を加へ 寵愛也 父は木曾義仲

母は巴 両親無双の人々 血筋なれば 大力量になるも断也 此節

然と 密に八幡三郎行家「が子を」呼びて言聞するは 汝は譜代相  
 伝之者也 曾我兄弟 斯様の次第也 大磯の宿に入 兄弟可宿儘に  
 仕懸て 可討果也 又 汝が身に請ては 父の敵と可言也 汝が父  
 八幡三郎行家は 河津が死後に伊藤九郎に討れたり 又 汝壱人に  
 ては難心得ければ 工藤が後見すべき也 随分取逃さぬ様に 大勢  
 可差向也と 家人の内に力量秀れたる若者共を撰み出して 都合八  
 十人 其外に世上の悪逆人 臍振り共を語らひて 都合百式三十人  
 建久四年四月廿一日を相図の定日に極め とかく 当座の口論に仕  
 懸べき也と 密々に言ならし 稽古の用意頻りにて はや近日に成  
 たり 此故 彼悪党原 そろりと大磯の宿に入 金銀は工藤が  
 後見なれば自由也 諸人に紛れて 遊興の人々の中に入 徘徊する  
 十郎 五郎は危き身の上 結局大勢ひに附覬わる 扱も笑止千万  
 此事隠しはすれども 悪事千里を走る習ひ 密々と評判になれり

和田小太郎左衛門尉義盛の卒に入 是 誠に天道の加護 自然に兄  
 弟を憐み給ふ故成べし 不思議に此度の難儀は逃れたり  
 和田義盛<sup>リ</sup>は曾我兄弟とは親敷縁類也 和田の兄 三浦別当義澄  
 は河津三郎祐泰が姉婿也 十郎 五郎が為には伯母婿也 其上に  
 和田義盛は元来武勇の達人にて 兄弟を常々不便に思ひ給へり 然  
 る所に 此物語を聞及んで 天晴大悪逆の不道人の有もの哉 河津  
 三郎を討たるも家人に致させ 其身已は誠に不知躰にて居れり 武  
 門の法に背き 今之見る陰もなき曾我兄弟を闇討すべき用意 など  
 や晴に出立て勝負を決せざる 其為に於ては義盛余所ながら兄弟を  
 介抱して 曾我が命救ひて 彼が本懐を達するを眼に見るべし 工  
 藤めが人不知にする事なれば 我も又 人不知にすべき也 第一に  
 は此度之難儀を救わん 又第二には 十郎は深虎御前に恋慕すると  
 聞侍は 大事の親の敵を持ながら 好色に溺れて 万一仇敵の事を

大に驚き 急ぎ十郎を呼 御辺達<sup>立</sup>はさばかり大事を思ひ立人かな

箱王丸を男になしたるも 和<sup>和</sup>田殿が仕業なるべし 前方 河津殿果<sup>玉</sup>給

ひし時 成人して工藤を討<sup>玉</sup>給へと 申つるを 子心に聞覚て 其語

りにて思ひたち給<sup>玉</sup>ふなよ 今は曾我殿養子となれば 偏曾我家督な

れば 河津の名字は不継 然<sup>然</sup>ば 家に違あれば 親の敵を討んとて

も辱にもあらず 日比厚恩の曾我殿に憂<sup>思</sup>き目を見せ給<sup>玉</sup>ふなよ 平に

思ひ留り 勿<sup>論</sup>論 小次郎をも恨<sup>恨</sup>み給<sup>玉</sup>ふなと 念比に異見を被申けり

十郎はさあらはぬ体にて 何にしに左様の事の有<sup>有</sup>べき 只小治郎殿

の心底を引申迄にて候とて帰り 五郎に此旨を語りける 時宗聞て

左申つる事よ 大に成たり 定て曾我殿も聞<sup>玉</sup>給ふべし 以の外也

最初より 小次郎めは可殺と申つるを留<sup>玉</sup>給ふ故に 斯<sup>か</sup>様にはなりた

り 悔ても不帰 先 老母の手前は繕<sup>玉</sup>ひ給へ 小次郎めは聞討すべ

きものをと 時宗<sup>時</sup>が騒<sup>さわ</sup>ぐを小次郎伝へ聞て 中々鎌倉に在ては 五

郎<sup>郎</sup>が左様に言<sup>い</sup>わゝたまるまじと 既に京都に逃上る 天然の佞人に

て 上には只上りはせで 右之何やどもを 不殘工藤左衛門に告知

せて 夜明けに京に上りける 天晴天命不知之人 不道人也

和田酒盛之事并朝比奈三郎勇力之事

工藤左衛門祐経は 京小次郎が音信を聞て 扱こそ 彼等兄弟

影のごとく覘ふこそうるさけれ 其上に 左<sup>ほ</sup>程取立つる其儘に置た

らんには 誠に危き事也 就中 五郎は大剛力之間 彼等兄弟世に

有内は 工藤が腹心の病也 何とぞ兩人を亡<sup>な</sup>き者<sup>もの</sup>にして 心安くす

べしと色々に思案しても 我手にかけては後難可有と 爰に日本一

の事あり 去日河津が射殺されたりと寄頭之節 網<sup>あ</sup>代<sup>と</sup> 松原に討れ

たり 我家へ 八幡三郎が子供 今は究竟の年輩也 其上 無双の

剛力 三十人が力量有とかや 弓矢取て恥かしからん者也 此者可

左衛門也 是非に可討と思ひ詰たり 勿論兄弟 五郎と只式人也  
 小次郎殿にも兄弟の血筋なれば 心を合てたべ 一大事に候得ば  
 御不承ながら同心あれと言 小次郎聞て 顔色大に變りて 驚懼し  
 て 当時工藤左衛門を可討との企 不可然 只思ひ留り給へ 又  
 是非に父の敵と思ひ 眼前に見る目も氣の毒ならば 都に上り給へ  
 某案内は可申候 又浪人の身の不自由を思ひ給は 院内の遠侍に  
 も成 院宣を申乞 鎌倉に申願 工藤が領地之内 本領をも取返し  
 て心に任せ給へ 某に於ては 左様の粗忽成事に一味 思ひも不寄  
 と 懸念もなく言捨て帰りけり 十郎も大に後悔して驚き 五郎に  
 此由を語る 時宗聞て さればこそ一大事を語給ふものかな 小次  
 郎めは日本一の不覺人と兼て知りたり 所領の敵ならば訴訟にも可  
 及 不思議の事を申ものかな 此男他言すべき事疑ひなし 悪事千  
 里の習也 工藤洩聞ば 一定 帰り討に可逢は眼前也 大事の前の

小事もや 斯様の不道人 助置て世上に洩さんよりは 討捨可申と  
 言 十郎聞て いやとよ 斯様の不覺人と不知して語りしは 我等  
 が不調法也 よもや他言もすまじ 一生之儀にあらねども 別腹に  
 ても兄の名の付たる人を討は 天道の咎もあり 我等が願望の障り  
 にも可成也 暫待給へ 我口留すべき也と 明の日 態と小次郎が  
 宿所に見舞て 昨日語りつる事 夢々誠にあらず たはむれに申し  
 たるにて候 よしなき事を語散らして 後日に脇より評判沙汰も候  
 は 一定貴殿之口より洩るゝと存候はん 其時は五郎が必定御恨  
 みを可申と 脅しければ 小治郎は臆病者也 又 五郎が勇力を知  
 る故恐れおのゝき 何とて他人に語り可申哉 御心安く被思召よと  
 互に口堅めして別れけり 此あとで 小治郎思ひけるは 恐しき事  
 也 彼等工藤殿を討ば 一定我身の難儀に可成 外に洩ばこそ 異  
 見にて 彼等思ひ留る様と 母の方に行て此事を委細に語る 老母

藤に為知たり 祐経聞て 一日片時も安堵難成 英兵百騎を撰みて

京小治郎臆病京都に逃上る事

大磯小磯 粧坂に集り 口論に仕置て 曾我兄弟を可討果と 定日

京小治郎信俊は如何成人や 天然大臆病の追従人として 此比 右

極れり 此儀 和田小太郎左衛門尉義盛聞給て 大に悲しみ 兄弟

大将家の御沙汰に 曾我兄弟之事 大に 首尾宜敷 願之筋道有之

返討に可逢は誠に残念也 我は親しき縁者也 聞逃しにはなるまじ

時は 必世にも可出様子なれば 俄に親類振りして 昼夜となく念

と 一門眷属百余人 究竟の兵を召供して大磯に行 祐経 定日を

比に來り ひたすら勧め 鎌倉に願ひて 河津の本領安堵せられよ

中に取り 三日の酒宴を始め 虎御前 并に十郎を呼 此節 五郎

かし 流石に 兄弟の血筋 心底之段 世にも頼母敷思ひて 十郎

は和田殿の様子を聞て 腹巻取て投懸 急ぎ 長の館に來り 廊下

は五郎に密に相談して 我々が念願 小次郎に語り 定めて血筋の

に窺ひ居たり 和田殿呼び給へども不來 此時 和田が三男 朝比

事なれば 一定 運を供に可相働也 他人に頼めば社 彼も河津殿

奈三郎義秀 十三歳の若輩立て 五郎が迎ひに行 三郎初ての勇力

の子也と物語す 五郎是聞 以の外 不入事也 小次郎に限りては

五郎が剛力世に言も断也 和田殿迎に立給ふ故 時宗も座に出て

鈍き男也 極て叶まじ 詞たくみに無用にし給へと 若又他人に可

二夜三日酒宴也 工藤が謀略水に成 鎌倉に帰れり 和田殿も眷属

洩出と言 十郎も 我も左様には思へども 仮令同意せず共 又仇

召連れ 帰り給へり

にはなるまじ 語りてみん 或時 小次郎が來りしかば 密に十郎

が部屋に招入 兼々大方は知り給ふべし 我々兄弟が親の敵 工藤



# 翻刻『曾我根元評判大全』 卷之七、卷之八

## 凡 例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかつて次の処置を施した。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名にへを付して7と区別した。
- 9 脱字は「」内に補った。
- 10 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

## 翻 刻

後 藤 多津子

曾我根元評判大全 卷之七

本章

京小治郎信俊は 曾我兄弟に入魂して 鎌倉殿の召に応じて立身  
被成よと 達而異見する 十郎誠と思ひ 心底を語るに 小治郎大  
に驚 当時 工藤を討んとの事 思ひも不依恐ろしくと 異見する  
兄弟後悔して 口留めしけり 小治郎 我身に難儀可成やと 老母  
に告たり 此故に 十郎を呼んで 大に異見ありけり 五郎是を聞  
小治郎め 聞討にすべきと言 此故に 京へ逃帰る 剩 此事を工